

# 看護専門学校の奨学金貸与が職業レディネスに及ぼす影響

山崎 裕美 関西看護専門学校

キーワード：職業レディネス 奨学金

## I. はじめに

全世帯と比べて生活保護世帯、児童養護施設、ひとり親家庭は、大学・短期大学よりも専修学校・各種学校に進学する割合が高くなっている。<sup>1)</sup> 専門学校を選択する理由として、大学は学費が高いことや就職に直結しづらいことも挙げられる。つまり経済的に困難な傾向にある学生が専門学校を選択するため、経済的支援が学業を全うすることにつながる。公的機関での奨学金制度もあるが、それらを利用せずアルバイトなどで経済的負担の軽減をはかっている。

看護専門学校では独自の奨学金制度を設けている場合が多く、卒業後一定期間関連施設で就労することにより返済が免除されるよう配慮されている。これは看護の質の維持向上をするため豊富な人材確保の目的もある。しかし卒業後の就職先が入学前に定められることは、職業レディネスに何らかの影響をもたらすことが推測される。奨学金貸与の意思決定は自由裁量のため、貸与していない者も一定数存在する。それらの学生は就職先の制限がなく自由に選択できるが、自由であるが故に迷いも生じ職業レディネスにも影響することが推測される。

それらに関連した先行研究はないため、奨学金貸与の有無による就職先の決定が職業レディネスにどのように影響しているかを明らかにし、今後の就職支援の一助としたい。

## II. 目的

奨学金の貸与の有無による職業レディネスへの影響を明らかにする。

## III. 用語の定義

職業レディネスとは、就職を控えた学生が職業に就くことに対する成熟度と若林ら<sup>2)</sup>は述べている。職業レディネス下位概念「職業選択への関心」とは、職業選択を重要な課題と考え、真剣に取り組んでいる度合い。「選択範囲の限定性」とは、ある範囲の職業に対し自分の興味や関心が結晶化されている度合い。「選択の現実性」とは職業選択過程をどの程度現実的に考えているかに関する次元。すなわち特定の職業

やその職業につくために必要な条件について、どれだけ知識を持っているか。職業の条件と自分の能力や適性との適合関係を認識する程度。職業や適性についての情報を吟味する必要性を認める度合い。

## IV. 方法

対象者：看護専門学校 3年課程 3年生 81名  
期間：2018年3月上旬に実施した。方法：無記名質問紙表を用い集合法で回収した。内容：若林<sup>1)</sup>らが開発した「職業レディネス尺度」の5つの下位概念で構成された30項目を用いた。「非常に当てはまる」～「全く当てはまらない」の5段階尺度で評定を求めた。分析方法は貸与者と非貸与者別に職業レディネスの平均を求め、両者の職業レディネスの平均より高群低群に分類した。そして2群間を $\chi^2$ 検定により相関を明らかにした。さらに職業レディネスの下位概念「職業選択への関心」「選択範囲の限定性」「選択の現実性」「選択の主体性」「自己知識の客観性」も貸与者と非貸与者の相関を明らかにした。期待値5以下はフィッシャー直接確立法で分析した。その他就職に関する意見を自由記載としてデータ収集した。

## V. 倫理的配慮

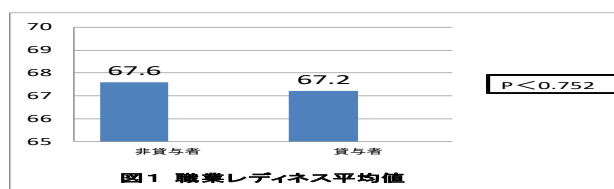
事前に研究趣旨・匿名性の確保・回答内容による成績への影響などの不利益が生じないことなどの説明を行った。

## VI. 結果

研究対象者81名中、有効回答者78名分。奨学金貸与者（以下貸与者と表記する）66名、奨学金非貸与者（以下非貸与者と表記する）12名であった。

1. 奨学金非貸与者と貸与者の職業レディネスの平均値には有意差がなかった。

(図1参照)



2. 職業レディネス各下位概念（以下下位概念とする）ごとの平均値を基準に高低2群に分類し、貸与者と非貸与者で有意差を分析した。全ての項目において、貸与者と非貸与者間の比較では下位概念の高群・低群ともに有意な差は見られなかった（表1参照）。

表1 職業レディネス下位概念		高群		低群		
		貸与者	非貸与者	貸与者	非貸与者	
職業選択の関心	$\bar{x}$	18.7	20	14.3	15	P<0.847
	n	35	6	31	6	
職業選択の範囲の限定性	$\bar{x}$	18.1	17.1	13.6	12.6	P<0.663
	n	34	7	32	5	
職業選択の現実性	$\bar{x}$	18.7	14.2	19.1	14.2	P<1.000
	n	41	25	7	5	
職業選択の主体性	$\bar{x}$	19.2	17.5	16.3	15	P<0.663
	n	34	7	32	5	
自己知識の客観性	$\bar{x}$	23	24	19.7	19.1	P<0.520
	n	29	4	37	8	

3. 貸与者と非貸与者それぞれに対し、就職が希望通りになったのかとの問いに、両者ともに希望通りになった83%、希望以外17%との結果が得られた。（図2参照）

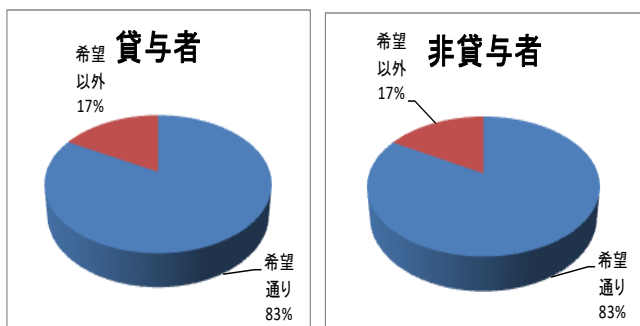


図2 就職希望について

## VII. 考察

貸与者と非貸与者で職業レディネスは下位概念も含め有意な差はみられなかった。これは奨学金貸与の有無によって就職の決定をしても職業レディネスの成熟に影響がないことが示唆された。しかしながら有意差はなかったが、下位概念「職業選択の関心」は高群低群とも非貸与者が平均値は高い。この概念は職業選択を重要な課題と考え、真剣に取り組んでいる度合いを示す。これについて貸与者は就職先がある程度決定されているため就職について考える必要がないからなのか、非貸与者は就職先を自由に選択できる反面自ら探す必要があるため、関心が高いのかは明らかではない。

また、貸与者と非貸与者ともに就職先は希望通りであったと同じ割合で答えている。このことは奨学金貸与の有無にかかわらず、概ね希望通りの就職を選択することができた表れである。宇城<sup>3)</sup>らは4年生大学看護学部の卒業生を対象にした調査で就職先の決定に影響を与えていた要因として「休暇や給与といった福利厚生よりも、立地条件と職場の雰囲気や新人教育内容の充実を重要視する傾向にあった」と述べている。また、村松<sup>4)</sup>らは「組織の魅力、看護職としての魅力、地理的条件」をあげている。本研究では貸与者・非貸与者別で要因を明らかにできなかったが、貸与の意思が入学前に固まっていた学生は就職先を含めて考慮した結果の学校選択、複数の関連施設により就職先の選択肢が多かったなど、その他前述の調査などで明らかになった要因なども推測される。

それらが明確になる質問の工夫が必要となる。さらに、今回の対象人数が少なくデータ数が乏しかったため、検証に耐え得るデータ収集が必要となる。

いずれにしても奨学金の貸与の有無による職業レディネスへの影響はない結果となったため、一定数の非貸与者に対しても奨学金の利用価値を再度伝え、経済的負担なく学業に専念できるよう支援していく。

## VIII. 結論

1. 奨学金の貸与の有無による職業レディネスへの影響はない。
2. 貸与者と非貸与者ともに就職は希望通りであったと答えた割合は同じであった。

## IX. 参考文献

- 1) 内閣府 子供の貧困に関する指標の推移 [www8.cao.go.jp/kodomonohinkon/youshikisya/k\\_4/.../s1.pdf](http://www8.cao.go.jp/kodomonohinkon/youshikisya/k_4/.../s1.pdf)
- 2) 若林満 後藤宗理ほか(1983) 職業レディネスと職業選択の構造—保育系・看護系・人文女子短大生における自己概念と職業意識との関連—名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科—30, 63~98
- 3) 宇城令 塚本友栄ほか(2009) 本学部卒業生の進路決定と就職継続に関する調査 自治医科大学看護学ジャーナル 第7巻 89~97
- 4) 村松十和 五十嵐慎治ほか(2016) 看護学生の就職先選択要因及び就職前に直面する不安 *Bulletin of Toyohashi Sozo University*